高知県立坂本龍馬記念館だより　2013（平成25）年4月　第85号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

飛鳴（ひとう）

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

疾風怒涛　SHIPPUU DOTOU

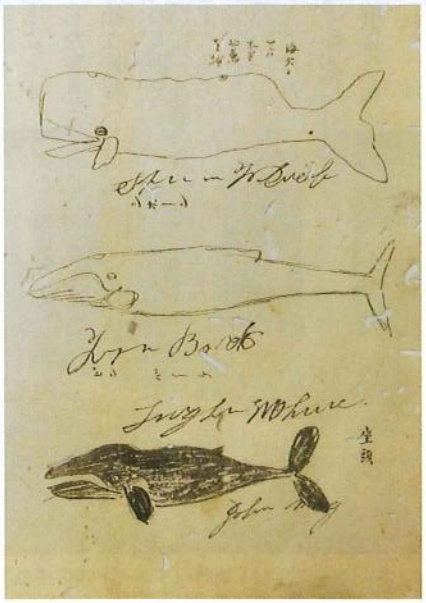
『『漂巽紀略』に見る万次郎の世界』展

写本、稿本、派生本など一堂に

現代に通じる国際感覚

会期：平成25年5月18日～7月19日

本展は、昨年7月に『漂巽紀略』（通称・大津本）が寄託されたことを受けて開催するものである。



※マッコウクジラとザトウクジラの図
本来、万次郎直筆であるページで一番下がサイン。捕鯨船に乗って世界中の海で様々な鯨に出会った様子を書いている。

原本は未だ行方不明

『漂巽紀略』とは、巽（たつみ）（南東）の方角に漂っていった物語の大略という意味になり、ジョン万次郎の漂流記である。作者は、土佐藩の絵師であり蘭学者でもある河田小龍で、完成本は山内家に提出した後、幕府に献上され、現在行方不明となっている。

これまで大津本は稿本（下書き）と考えられており、小龍や万次郎の直筆ではないかと考えられていた。寄託を受けて、ジョン万次郎研究家の北代淳二氏・永国淳哉氏にご覧いただいたところ、残念ながら大津本は万次郎の直筆ではないと確認された。

『漂巽紀略』には、挿画が多数あり、大半は小龍が描いているが、中には万次郎自身が描いたものがあり、画の下に万次郎が「John Mung」とサインしている。大津本では、万次郎のサインが「John Mang」などと綴りを間違っている箇所が何箇所かあり、稿本の写しの可能性が高い。

紙は「川田氏家蔵」と印字された小龍専用の紙を使っていることから、早い時期に、小龍宅で、小龍が指揮を執って模写されたものの可能性が高いと推測できる。

写本は6種類？

現在『漂巽紀略』の写本は、幕末当時に写されたものが6種類あると考えられている。その一つは、100年前の大正元年（1912）に海を越えてアメリカに伝わり、現在ではローゼンバック財団が所蔵している。ローゼンバック財団では、アメリゴベスプッチが書いた『新大陸』も所蔵しており、こちらはヨーロッパにアメリカを紹介した最初の書籍と位置付けられている。そして、『漂巽紀略』は、日本にアメリカを紹介した最初の書籍、と位置付けられており、『新大陸』に匹敵するほど非常に評価が高い。

万次郎が持ち帰ったアメリカ情報は、幕末の日本とアメリカにとって、現代では計り知れないくらい大きな価値を持っていた。そのため、『漂巽紀略』は、多くの写本や派生本が作られ、幕府はもちろん、坂本龍馬や先進的な考えを持った幕末の人たちが、大いに参考とした。『漂巽紀略』は、幕末国際情報の基礎資料であり、幕末日本の国際化を考える上で大変重要な資料である。

幕末史研究に重要なヒント

今回の展示では、大津本を中心として、ローゼンバック財団所蔵の『漂巽紀略』など、可能な限り多くの写本や稿本、派生本を集め、これらがどのような経緯や目的で作られていったのかを探ってみたい。

『漂巽紀略』の成立状況を解明することによって、万次郎の漂流の足跡や意義を正しく理解し、幕末史研究に役立つ展示を行いたい。また、万次郎の国際交流は、現在でも学ぶべき点が多々あり、多くの方に知っていただきたい。

三浦　夏樹

好評の〝龍馬の手紙〟展 後1カ月

龍馬の人となりが浮き彫りに

1月12日より開催中の「龍馬の言伝―手紙の楽しみ方―」展も、残りあと一ケ月となった。龍馬の手紙の特色に着目し、2階企画展示コーナーをすべて龍馬の手紙で埋めるという、これまでありそうでなかった企画であるが、入館者にはおおむね好評である。現在も展示は継続中であるが、こうした感想を入館者アンケートの中から拾ってみたい。

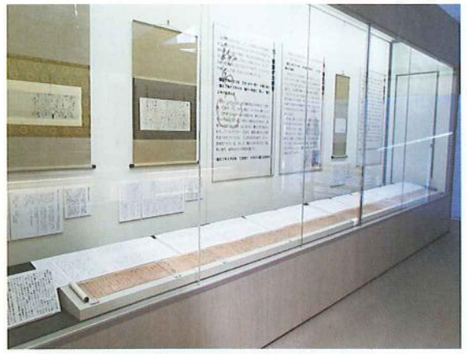
手紙に現われる龍馬の癖

龍馬の手紙については、「筆まめな人だったんだと感心」「手紙はすごく文が長くてびっくりした」「実際の文章から人柄も見てとれ、歴史がまた好きになった」などの感想が寄せられた。「坂本龍馬」という名前はよく知られているが、実際に手紙文を目にすることで、文字の大きさや余白、手紙の長さ、文体など、龍馬本人がもつ独特の「くせ」を読み取ることができる。こうした書き癖から、観覧者に龍馬という等身大の人物をより身近に感じてもらうという本展の狙いには、応えていただけたように感じる。なかには「手紙を多用した人物分析がユニークで面白い」「企画展が思っていた以上によかった。手紙を通して龍馬の人となりがよく分かったおもしろい企画」といった評価もいただいている。

展示室の様子

現代語訳のパネルも

一方で、パネルやキャプションの「字が小さい」という指摘も寄せられている。通年、地下1階で手紙の常設展示を行っている当館では、常に指摘され、課題となっている事柄でもある。今回の展示を契機として、読み下し・現代語訳パネルについては、文字を拡大したものに作り替え、地下1階の常設展示も含め、順次入れ替える作業を並行して行っている。また、当館では以前より、龍馬の手紙を「読んで」いただくことを期待し、博物館では通常読み下しパネルのみの古文書展示が多いなか、現代語訳のパネルも展示している。「現代語訳がついているのが分かりやすくてよい」という声がある一方、「字が多い」という指摘もあり、展示を行う側としてはジレンマを感じるが、龍馬をより詳しく知りたいという観覧者の要望に応えるためには、ご容赦を願いたい部分でもある。


ケース手前　通称「5メートルの手紙」
(慶応3年6月24日乙女・おやべ宛)

他には、「龍馬の手紙がたくさんあって身近に感じられた」「手紙はこんなにも残っているのかと思った」といった、手紙の多さについての感想が寄せられた。現在、龍馬の手紙は140通あまりが確認され、うち100通あまりは原物が残っており、当館では寄託を含め5点の真物を所蔵・保管している。本展では5点の真物すべてを展示しているが、「本物をもう少し増やして欲しい」という声もあった。

企画展開催中は常設を含め、館内展示のほとんどが龍馬の手紙となっている。アンケートを見直すことで、通常当館が抱える常設展示の課題を併せて再認識している。

「龍馬の言伝―手紙の楽しみ方―」展は5月17日(金)まで、お見逃しのないようご覧いただきたい。

亀尾　美香

『年報平成23年度』発行

例年発行される『龍馬記念館年報　平成23年度』が、3月末にできあがった。平成23年4月から24年3月に実施された催事を掲載している。23年度は開館20年の節目の年にあたり、開館20年を記念したシェイクハンド像制作や記念式典、3年連続企画の最後となった「風になった龍馬」展、およびアメリカフォーラムの詳細などが掲載されている。

亀尾　美香

年報誌面

私のジョン万次郎論(上)

～『漂巽紀略』展に寄せて～

歴史研究家　永国　淳哉

5月から待望の『漂巽紀略』展が始まる。

ジョン万次郎は14歳で漂流し、無人島に漂着した後、アメリカの捕鯨船に救われた。11年後に帰国するが、その多くを捕鯨船員として過ごしている。土佐に帰国後、万次郎が見聞した世界やアメリカ本国で学んだ知識を、絵師・河田小龍が聞き書きした。その漂流報告書が『漂巽紀略』である。

河田小龍自筆本の所在は分からないが、各地に写本が現存しており、今回はそれらの多くを収集・展示するという。大いに楽しみにしている。

私は長年万次郎研究に関わってきた。そこで私論ではあるが、ジョン万次郎について3回にわたりお伝えしたいと思う。

「天」「地」「人」

歴史的な人物は、それぞれ「天」「地」「人」に恵まれていたという。ジョン万次郎の場合も、まさにそのことが当てはまる。

万次郎にとって「天」とは時代である。異国船が日本の周辺に出没してクジラを捕りに来るようになった。そのおかげで万次郎は無人島から米国捕鯨船に発見され、命が救われたのだ。

「地」とは、その米国捕鯨船のホイットフィールド船長の故郷アメリカである。

独立から、まだ70年も経っていない若いアメリカ合衆国。広大なアメリカ大陸の北東部にある国は、まだ13州しかなく、ニューイングランドと呼ばれていた。

万次郎は、独立戦争発端の舞台となったボストンの隣りのニュー・ベッドフォードに入港し、川向こうのフェアヘブンに3年居住した。万次郎は馬にまたがって専門学校に通い、航海学を基礎から学んだ。日本では、馬には侍の子息しか乗れなかった時代である。

「宮人等も往来に権威を取と云う事かつて是なし」。

「百姓なり共、学問次第にて挙げて用いらる」。

こうした「地」で、その地に住む自由な「人」を知り、デモクラシー社会を実体験したのである。

万次郎が帰国を決めた理由

万次郎は別天地アメリカで3年暮らした後、捕鯨船で世界の海を回り、多くの島々を見てきた。大海原に勝手に国境線を引いている政治の怖さも知った。

万次郎が2度目の捕鯨船の航海からニューベッドフォードに帰港したのは、1849年8月のことだ。この年は景気にわいていた。カリフォルニア金鉱が発見されたからである。〝金鉱掘りたち〟のことを「〝フォーティナイナー〟(49年人)」と言って、今でもスポーツ団体名などで使われるほど、明るい響きがある年であった。

万次郎もまた資金を稼ぐため、金鉱にいた。しかし、このカリフォルニア金鉱の街に集まってきた「人々」は、同じアメリカでもニューベッドフォードの人たちとは違っていた。万次郎にとって拝金主義に走る人々は耐え難く、ふと懐かしい日本のことを懐かしく想い出したのではないか。

この頃万次郎は不思議な行動をとっている。「仇に非ず、仇に非ず」こう叫びながら、〝金鉱掘りたち〟の山を駆け降りたという(『漂巽紀略』)。生まれ育った日本への何かしら強い気持ちがあったようにも思える。

その後、ハワイに向かい、漂流仲間の先輩漁師たちに再会した。話し合いをして3人で、鎖国日本に決死の帰国を果たすのである。

幕末の人物に大きな影響

万次郎が帰郷を果たした実体験は、日本にとっても教育的な影響を及ぼした。

その基盤となったものが、漂流記『漂巽紀略』である。その異国譚が、土佐の吉田東洋や龍馬から幕臣勝海舟まで、日本の歴史の流れに係わる人々と関係し、幅広く大きな影響を与えてきた。

万次郎と直接会った吉田東洋の場合、万次郎が米国ニューイングランド地方でデモクラシー社会を実体験したことを高く評価した。そこで、土佐の海事思想を原点から見直し、『海南政典』『律例』の改正から、庶民的な学校建設など企画している。

龍馬の場合は、『漂巽紀略』の筆者・河田小龍に直接会ったことによって、後に土佐海援隊結成へとつながった。万次郎にしても、土佐藩船・夕顔の斡旋を手伝い、間接的ではあるが、龍馬とのつながりができた。

龍馬は、咸臨丸で万次郎と同行した勝海舟を「日本第一の先生」とまで慕い、勝が行っていた神戸海軍塾の塾頭になった。その影には万次郎の存在がある。

静かなる勇気と、高い志

万次郎の「天」「地」「人」のスケールは大きい。

これらを全て結果的に幸いに成就させたのは、〝機会(チャンス)〟との意志決定〟に際して、万次郎に〝勇気〟と高い〝志〟があったことを強調しておきたい。

海に育った少年の〝勇気〟。独り旅しながら培われた〝志〟。

海を愛したヘミングウェイに、「抑圧された時、逆境の中で品格を失わない、静かなる〝勇気〟」(Grace under Pressure)という言葉がある。ジョン・F・ケネディも著書『勇気ある人々』の序文に、この言葉を引用している。

私も万次郎の生涯の節目節目における〝勇気〟ある意志決定を想うとき、ついこの一文をつぶやいてしまう。それは物静かで古武士の風格を感じるものである。

高い〝志〟というのもルソーのいう「自然を見よ。そして自然が教える道をたどっていけ」に通じるように思う。『社会契約論』を著し、デモクラシーの元祖といわれるルソーは、旅からさまざまなことを学んだ。万次郎もまた世界を航海し、多くのことを見聞して学んだ。

何より自由と平等の国アメリカを知った万次郎に高い〝志〟がなければ、危険をおかしてまで帰国していなかっただろうし、その漂流記は単なる冒険話で終わっていたはずである。

(つづく)

万次郎の肖像画と、自筆のアルファベット
(永国淳哉著『雄飛の海』カットより)

龍馬勉強の環境づくりを

龍馬記念館の課題と展望　“未来の龍馬を育てる”

新年度がスタートしました。2010年の龍馬ブーム以降賑やかだった館内も、だんだんと落ち着いてきました。今年は勝負の年。企画展の内容を充実させることはもちろん、〝未来の龍馬を育てる〟を課題に、これからの時代を担っていく子ども達へ向けた坂本龍馬教育にも力を入れていきたいと思います。

それには地元の協力も欠かせません。当初からの課題であった高知県内からの入館者の割合は、龍馬ブーム以降増加傾向にあり、ハンドインハンドにはたくさんの地元スポーツ団体や企業からもご参加いただきました。この勢いをそのままに、今度は当館の展示にも興味を持ち、龍馬や龍馬が生きた時代について学んでいただきたいと思います。そして高知の子ども達が自然に龍馬について学べる環境づくりを進めていきたいと思います。

◆子ども教室を学芸員が担当、よりグレードの高いものに

毎年好評ですぐに定員に達してしまう子ども教室。今年からは学芸員が担当し、工作を楽しみながら歴史を学べるものに。人気のもんきりうちわ作りは継続。新たに、紙を紐で綴じる「和本作り教室」を開催します。楽しい工作教室をきっかけに龍馬に興味をもってもらいたいと思います。

◆企画展の図録作成、関連イベントも開催

今年の企画展は龍馬に影響を与えたジョン万次郎や天誅組にスポットをあてたものや、武術など一風違った角度から龍馬を見つめる企画展を開催。7月20日からの「土佐の武術」展では、関連イベントとして龍馬が学んだ小栗流棒術の流れを伝える県の無形文化財「山北棒踊り」を当館にて実演いただくなど、イベントも開催予定。また、5月18日スタートの「『漂巽紀略』に見る万次郎の世界」展では図録を作成予定です。

900人が笑顔でつながったレッツゴー！ハンド・イン・ハンド

◆龍馬月間はイベント多数

11月15日(金)～17日(日)の3日間はイベントを多数開催します。

龍馬の誕生日である15日は龍馬記念館を終日無料で開放。夜には桂浜で3回目となる「手筒花火」をご披露いただきます。

17日は2回目となる「レッツゴー！ハンド・イン・ハンド」を開催。昨年は募集人員の500人を大きく上回る900人の方にご参加いただき大変ご好評いただきましたが、初めての試みでもあり細かい部分では至らない点が多々あったかと思います。今年は5月頃よりチームを結成、前回の反省点を活かしながら半年かけて準備を進める予定です。

そして15～17日の3日間連続開催のイベントが「朗読コンサート」です。龍馬の姉・乙女でおなじみとなった女優・小林綾子さんが、今回は龍馬の妻・お龍にも変身。一通だけ残されている龍馬からお龍へ宛てた手紙を朗読します。龍馬の手紙と童謡のコラボコンサートでピアノを演奏してくださった福田明子さんは、今度は叙情歌の演奏で会場を盛り上げます。そして今回、新たなメンバーとして月琴奏者の永田斉子さんをお迎えします。龍馬の勧めでお龍も稽古をしたという月琴の音色を聴く、またとない機会です。解説は坂本龍馬記念館の尾崎、西本が担当。乙女、お龍、加尾、お登勢…多くの女性に支えられた龍馬の書いた手紙を、5人の女性たちで奏でるコンサートです。

イベント盛りだくさんの龍馬月間をどうぞお楽しみに。

尾崎　由紀

乙女姉さんになって龍馬からの手紙を読む小林綾子さん

聞き書き

妻 眞喜子が語る「作家・宮地佐一郎の思い出」①

3月8日は作家で龍馬研究家、宮地佐一郎先生（1924～2005）の命日である。宮地先生が亡くなられて8年の歳月が流れた。先生は生前よく「僕は土佐を脱藩した」と言われていたが、その言を借りれば、今生を脱藩して8年が経った。

そんな今、先生の妻である宮地眞喜子さんが、故郷高知に帰って静養しておられる。関東にいるとき眞喜子さんは、「無性に土佐に帰りたくなるときがあるの。土佐に帰ると元気になるから」とおっしゃっていたが、今がちょうどそんな頃合であったようだ。

高知の空と海、太陽が、眞喜子さんとともにある。そして、問わず語りのお話によく出てくるのは夫、佐一郎氏のこと。私たちにとっても、龍馬研究にとっても、大切な方である。

そこで、この機会に眞喜子さんから佐一郎氏の思い出を真正面からお聞きしたい。そんな申し出をしたところ、「佐一郎さんも喜ぶと思いますよ」と快諾いただいた。

宮地佐一郎先生は、平尾道雄先生とともに龍馬研究になくてはならない存在である。『坂本龍馬全集』をはじめ多くの著書の最後となったのが、『龍馬の手紙』（講談社版、三刷）。その巻末に、「縁あってこの世で50年、常に傍らにいて枝折戸の如き存在に甘んじてくれた妻、宮地眞蓮へ、万福の感謝を捧げる」とある。

宮地眞喜子さんの語る宮地先生の思い出を、次号からご紹介していく。

前田　由紀枝

宮地佐一郎氏と眞喜子夫人。
東京都三鷹市の自宅で。
=1985年ごろ

宮地　眞喜子（みやじ・まきこ）プロフィール

昭和5年(1930)、韓国京城(現・ソウル)生まれ。
父井上豊治は教員、母勝与。12人兄弟の5女。京城第一高等女学校在学中に高知に引き揚げ、中村高等女学校から、高知師範学校卒業。教員となるが、まもなく宮地佐一郎と結婚。
上京後、評論家亀井勝一郎の婆子夫人に勧められ、茶道・表千家不白流の師範となる。師範名は眞蓮。茶室は一心庵。

“龍馬スピリッツ”発信　次のステージへ

現代龍馬学会5周年総会テーマは“時代の絆”

多彩な発表者・基調講演は山本一力氏

「坂本龍馬記念館・現代龍馬学会」＝片岡雅文会長＝がスタートして今年、5年を迎える。学会の基本は研究よりも龍馬スピリッツの実践、「第5回現代龍馬学会」は5月11日(土)、会場は隣の国民宿舎「桂浜荘」に決まった。総合テーマは「時代の絆」。記念基調講演には作家の山本一力氏を招くなど、発表もバラエティに富んでいる。

学会の会員は全国に散らばるだけに、日頃の情報交換などは坂本龍馬記念館を中心にインターネットを使ったメールのやり取りなどでつながっている。しかし、それには限度があり顔を合わせる機会として、1年に1度の総会と発表会を実施。また、日常の活動としては月一度の例会、これも年一度の館のギャラリイを使ってのパネル発表などとにかく発信に力を入れている。2月、南国市才谷で行う梅見会は年間〝行事〟になってきた。

そんな中で今年は5周年。登録会員は116人となった。地道な活動が徐々に定着、拡大の方向に向かっている手ごたえを感じる。今回5周年はそれだけに気合も入ってきた。3月16日の理事会で大会スケジュールはまとまった。発表者は6人。

1、元産経新聞司馬遼太郎担当記者、窪内隆起氏＝司馬遼太郎のこと＝
2、兵庫龍馬会・右近浩幸氏＝龍馬は神戸で何を学んだか？神戸海軍操練所に学んだ海援隊の運営手法＝
3、中岡慎太郎館学芸員、豊田満広氏＝中岡慎太郎の思想について―「時勢論」を中心に＝
4、龍馬研究会、岩崎義郎氏＝お龍さんの生涯（晩年を中心に）＝
5、高校教諭（広島県）、森本邦生氏＝同じ時代を生きた者達の剣＝
6、坂本龍馬記念館学芸員、前田由紀枝＝〝龍馬〟を守ってきた男たち―坂本弥太郎と弘松磯之助に見る家族の絆＝

発表に先立っての記念講演は山本一力氏に了解済み。夜は懇親会となっている。片岡会長は「揺れる現代はまさに龍馬の登場を待っています。学会も節目の年、前進する勢いをつけたい。是非、参加して欲しい」と呼びかけている。

森　健志郎

拝啓 龍馬 殿

平成24年12月21日～平成25年3月20日

95通

たぶん私たち高知人の反骨心はあなたから受け伝えられてきたのでしょう。私はあなたの志を受け継ぎ娘へと伝えていきます。娘は海洋高校に行きがんばっています。龍馬はんの影響です（笑）キンタマというユーモアな手紙は、すごいユーモアな私でも笑ってしまいました。生きます！高知で！

（12月22日　高知　M・H　40歳　女性）

今年もあなたに会いに来ました。ここ数年、毎年年末になるとあなたに会いに土佐へやってきます。そしてあなたに触れ、高い志に憧れ、自分の心に熱い炎をたきつけてもらって帰ります。毎年、家族旅行が高知なので子どもたちにはちょっとかわいそうなのですが、うれしいことに子どもたちも「龍馬ファン」になりつつあります。私は「ファン」ではなく「尊敬すべき人」としてあなたをこれからも愛していきます。

（12月27日　奈良　N・I　49歳　男性）

先日、『龍馬伝』のDVDを大人借りして全巻一気に観ました。もうメチャメチャ感動しました。自分の考え方と違う人や色んな立場の人のことを否定するのではなく、相手の考え方も認めた上で、自分の考えやこの国の大事な方向性を説く龍馬には素晴らしいとしか言えません。私は特に高杉晋作にも感動しています。こんな人たちが私の周りにいたら、たぶん自分の人生も変わるんじゃないかと思うぐらい素敵な若者だったと思います。私も今後、少しでもいいから私利私欲にとらわれず、大儀をもって生涯を終えたいと思います。

（12月28日　東京　M・Y　51歳　男性）

2012年12月31日付で会社を退職した埼玉県より来た38歳の男です。坂本龍馬様はこのまま土佐にいては日本が良くならないと思い脱藩をしましたよね。私も同じように会社にいて成長することができない状況がいやになり退職しました。そこで会いたくなったのです。坂本龍馬様のように大きなことは出来ないかもしれませんが、何か力をもらえたような気がします。今日はありがとうございました。私は負けません。

（1月8日　埼玉　M・M　38歳　男性）

郷である高知に来ました。桂浜はとても美しい海ですね。時間がゆっくり過ぎ、とても気持ちが晴れやかになりました。この海の雄大さが龍馬さんととても似ていると思いました。今現在の日本は、幕末と同じように時代の転換期のような気がします。龍馬さんが今の時代を生きていたら、どのように日本を変えたのでしょうか。気になりますが、これは私たちが答えを出していかなければいけないですね。私も龍馬さんのように自分が正しいと思うことを身分や常識で判断するのではなく、おこなっていける人間になり、少しでもこの国の未来に貢献していきたいと思います。まとまりのない文章ですが、今回高知に来てとても良かったです。龍馬さん、高知の皆さんありがとうございました！

（1月8日　神奈川　K・I　30歳　男性）

50を過ぎて、再び人生の大きな節目を迎えようとしています。今日、一番大好きな場所、坂本龍馬記念館の屋上で波の音を聞きながら、太陽の日差しをいっぱい浴びてたくさんのエネルギーをいただきました。さあファイト！

（1月13日　福岡　S・Y　51歳　男性）

龍馬さんの手紙が心にきました。私も手紙を書くのが好きなので、人の心に届く文を書けたらと思いました。

（1月24日　大阪　A・Y　37歳　女性）

お元気ですか。久しぶりに来ました。やっぱり桂浜のこの場所はとてもいいです。落ち着きます。そして何か心の中に強い意志のようなものが湧き上がってきます。昨日、高齢者における社会の現状を映し出したドキュメントを見て涙があふれてきてとまりませんでした。長い人生、必死で生きてきた人たちが安心して人生の最後を迎えることのできない現実に、私は悲しく切なくてたまらなくなりました。残りの人生、そういう人たちのために何か出来ることを見つけ、生きていきたいと強く思いました。今日ここに来て、その道に向かって頑張りたいとあらためて思ったのです。頑張りたいです。私を見ていてほしい。応援してください、龍馬様。

（1月28日　H・M　59歳　女性）

私は大抵の人がそうであるように、『竜馬がゆく』を読んであなたを知りました。（中略）そして色んな龍馬関係の本を読みあさり、益々好きになりました。だけど謎なんですよ。本当のあなたはどんな人だったんですか？あなたのことを知れば知るほどその思いは強くなっていきます。ただ私は勝海舟先生が大好きです。そして船と海が大好きです。だから気が合いそうな気が…。京都へ帰ったらお墓参りに行きます。その日までさようなら。

（2月2日　京都　T・O　41歳　男性）

家を出るときに母から「龍馬くんに会いに行くの？宜しく言っといて！」と伝言をたのまれました。また来る機会がありましたら、その時も母の伝言を持ってきたいと思います。

（2月9日　埼玉　M・Y　34歳　男性）

熊本から来ました。坂本龍馬の大ファンです。大学生のうちに絶対に一度は訪れようと思っていたので叶えることができ本当に嬉しいです。京都にある龍馬の墓には行ったことがあるので、この生まれた地で何か感じることができればと思います。地元に横井小楠の家「四時軒」もあり、勝手に縁を感じてもいます。来春から小学校の教員をすることになっているので龍馬のような生き方のできる子どもたちを育てることができるよう、自分自身もそういう生き方ができるように精一杯やっていこうと思います！

（2月14日　熊本　Y・S　22歳　男性）

同じ海を見れて幸せです。自由とは何か本気で考えます。自分を持つこと。できるでしょうか？

（2月15日　東京　M・K　28歳　女性）

いまだに道迷ってる感のある男です。しかし、今日あなたに会い「世の中もう少し気楽に考えや。へみたいなものだ。やりたいことを志を持って思いきりやればいい。それだけでいい」と言われた気がしました。何か見つかったような気がします。ありがとうございました。

（2月16日　千葉　M・T　50歳　男性）

龍馬さん、高知に走りに来ました。60才を記念してフルマラソンを全国完走を目標に10年がかりで走ってます。4時間を切って走るのは大変です。でも男の目標、頑張ります。明日も目標は3時間50分です。応援よろしく。

（2月23日　千葉　M・U　61歳　男性）

りょうまさんのお陰で公務員試験に合格できました！

（2月24日　埼玉　M・U　30歳　男性）

今日はいいお天気で龍馬日よりでした。シェイクハンドで写真も撮りました。満足です。また来たいです。

（2月25日　兵庫　M・F　20歳　女性）

志を持つきっかけとなったのは坂本龍馬さんとの18歳の出会いでした。不良で何のとりえもない現実、中途半端な生き方をしていた日々の中で、志を持ち一人で行動し実現してゆく行動力と挑戦をくり返し己の進むべく自分の命の使い所を見つけ、一生懸命生きることを教えられました。あなたに出会い25年…くじけそうな時、何度となく桂浜を訪れました。何度となく涙しました。しかし現在、会社の代表取締役となり「日本のものづくりのお役立ち」を志にして社員と共にがんばっています。動は生なり（動けば生まれる　行動こそ真実）を座右の銘にして生きています。

（3月1日　愛媛　Y・S　43歳　男性）

今日はひなまつり。娘、夫、いい天気で海を見ています。龍馬様も海を見ていたことでしょう。志半ばで大変残念なことでしたね。でも日本、高知、愛媛も平和でやっております。御安心を。

（3月3日　愛媛　S・N　60歳　女性）

＊＊＊編集者より＊＊＊

拝啓龍馬殿にお寄せいただいたメッセージが1万5千通を超えました。手紙を書くこと自体が少なくなった今の時代、龍馬は世界で一番多くの手紙を受け取った人物かもしれません。短い文章に強い想いが込められた手紙、表に書ききれず裏にまで書いているもの、子どもさんが覚えたてのひらがなで一生懸命書いてくれた手紙など、どれも龍馬への熱い想いが伝わってくるものばかり。やはり手紙はいいものです。最近は私も友人に手紙を送って近況を知らせています。便箋や切手を選ぶのも楽しいです。皆さんも大切な人に手紙を送ってみてはいかがですか。

尾﨑　由紀

ここは館長の部屋　森　健志郎

梅咲きて

今年、龍馬記念館のスタート企画は「龍馬の言伝（ことづて）」展。〝筆まめ龍馬〟の面目躍如たるところ、日本の歴史を変えたとも言うべき大政奉還直前の後藤象二郎宛の一通など人気を集めている。この熱い雰囲気にもう一段花を添えているのが玄関に置いた梅の花である。企画展の大看板の左右下にその梅の花は控えている。右に白梅、左に紅梅、それも大きくて花瓶に入り切らず、バケツほどのあつらえ器に納まっている。見事なり！である。

ところが今年はお正月に門松の梅を用意するにも何故かこずった。「今年は梅が集まらないねえ」などとも言っていた。突然、あの才谷、龍馬・坂本家の才谷から立派な一枝が届いた。学会のM子さんの好意である。不思議なことにそれがきっかけとなったかのように、龍馬記念館に梅の花が次々持ち込まれるようになった。

中には名乗らぬおじさんもいる。5、6回どころではない。職員とは顔見知りになるほどの回数なのにいくら「お名前は」と聞いても笑って名乗らない。ただ龍馬ファンには違いあるまい。

先のM子さんにお願いして才谷から一本の苗木を届けてもらった。実は昨年、台湾の元総統、李登輝先生の病気快気祝いに台湾を訪問した。台湾の国花は梅、李登輝先生は大の龍馬ファン。となれば、龍馬の里、才谷の梅はずばり「才谷梅太郎」。龍馬そのもの。最高の贈り物だと用意したが、運搬の季節が悪く止む無く次の機会という事になりその後、尖閣諸島問題などで台湾の微妙な政治状況から、折角の梅は送れずじまいとなった。

そこで、龍馬記念館東側の空間に立ててある「烈女　坂本栄之碑」の横に移植した。ただ、栄女が脱藩する龍馬に刀を送り自決したとの話は風説だからということで、この碑はあまり目立たぬこの場所に置かれたいきさつがあると聞いている。ということからすればこの梅もいわく付きの梅になるかも知れぬ。

高さ1メートル、紅梅は可憐である。根付いてほしいと思う。腐葉土と今朝は水も差した。沖からの潮風はまだ冷たい。

遮光・飛散防止フィルムを設置　東日本大震災がきっかけ

災害時のガラスによる入館者の被害を防ごうと、高知県はこのほど約730万円をかけ坂本龍馬記念館の窓ガラスなどを飛散防止フィルムで装備した。これは、一昨年3月11日の東日本大震災を教訓に実施することになったものだ。

館は全総ガラス張りという特異な建物で、またそれが海に乗り出す船をイメージさせ、龍馬に通じると人気の一つでもある。ただし、ひとたび大規模な災害が起きた場合、その〝強み〟が〝弱み〟となる危険性をはらんでいる。それだけに、入館者の被害、貴重な資料保護の観点から、飛散防止フィルムの設置となったものだ。

作業は、館が年中無休体制であることから、開館前、閉館後を重点に10人の作業員が担当。1月10日から3月8日までの工事期間で無事作業を終えた。施工面積は窓ガラス736・9平方メートル、展示ケース50・6平方メートルに及んだ。

森健志郎館長は「開館以来20年を越え、ハード、ソフト両面で色々なひずみが出てきている。しかし、入館者の皆さんの安全は保障されなければならない。ささやかな第一歩ですけれど、よかった」と喜んでいる。

板垣　要次

●人事異動●

副館長と職員一人が退職

高知県文化財団の春の人事異動が発令となった。龍馬記念館では副館長と職員一人が退職する。毎年恒例のことながら、ベテランの二人だけに惜しまれている。

在任中は、皆様に大変お世話になり感謝しております。龍馬ファンや入館者の要望等に十分に応えることができずに、ご迷惑をお掛けしたことを反省しているところですが、熱い龍馬ファンに支えられて楽しく仕事をすることができました。ありがとうございました。

副館長　板垣　要次

あっという間の4年間でした。まだまだ貢献しきれていない思いでいっぱいです。今後も何らかの形で龍馬記念館のお力になれたらと思っています。ありがとうございました。

山中　真優

海の見える・ぎゃらりい

■ 4月からは龍馬讃歌会の「龍馬讃歌百人一首」展開催！

古式ゆかしく宮中行事「被講」も再現

新年度、海の見える・ぎゃらりいは、「龍馬讃歌百人一首」展からスタートする。

龍馬讃歌会は、高知歌人社をはじめとする龍馬好きの歌仲間たちが集まったもので、メンバーらが詠んだ歌を、代表の増井はつこさんの発案で百人一首という形にまとめたものがこの「龍馬讃歌百人一首」である。メンバーが詠んだ歌の他にも、京都の下冷泉家第20代当主である冷泉為弘様とご令室の美智子様が詠んで下さった歌や、龍馬をはじめ坂本家の人たちが詠んだ歌など合わせて118首展示され見ごたえは充分。歌の中には、頷き共感するものや、つい口元がゆるんでしまうもの、胸が熱くなるものなど様々だが、どの作品からも龍馬に対する思いが感じ取れ、龍馬人気の高さがうかがえる。

また初日の4月1日には龍馬讃歌八首の披講式も行われる。披講とは和歌に節をつけて詠みあげる平安時代より宮中に伝わってきた行事のことで、式には冷泉為弘様、美智子様も参加される。古式ゆかしいこの行事は、現在ではあまり見ることのできない貴重なものであり一見の価値ありだ。展覧会は5月7日まで。

小島　千穂

■「クジラは友達写真展」～土佐沖で龍馬が待ちゆうぜよ！～

“リョウマ”らのパネル50点　今年は“出会い率”97パーセントに挑戦

サメッチ親子

土佐湾にはニタリ鯨を中心に47頭の鯨が生息している。

桂浜から鯨観光船「鯨人丸」を出し“ホエールウオッチングIN桂浜”を業とする坂本径世さんはガイドでカメラマンの仕事もある。見ているうちに鯨の姿や仕草の特徴から“リョウマ”“シンタロウ”“マンジロウ”“サメッチ”などの呼び名をつけた。いつも女性と一緒の“リョウマ”。身のこなしがすばやい“シンタロウ”“マンジロウ”は図体が大きいといった具合。坂本さんの友人やお客さんも含めて9人が撮影した50点の写真が並んで入館者を驚かせた。シャチやイルカ、海亀、ジャンプ姿や食事中の鯨の姿は圧巻。龍馬記念館から見えそうな場所を行くイルカの大群の写真もある。さらに、地元の洋画家、吉松由宇子さんは、鯨に乗る少女を描いた油絵2点を協賛出展し彩を添えた。

会場風景

さて、ホエールウオッチングのシーズンは4月末から10月末まで。昨年は実に97パーセントという高い“出会い率”だったと言い、坂本さんは「今年も頑張る！」とファイトを燃やしている。

森　健志郎

■『鐔（つば）は知っている―土佐の幕末維新』（小島博明著）

2010年4月から2012年10月まで2年半にわたり小島一男（博明）さんが本紙に連載した『「鍔（つば）は知っている！」土佐の幕末維新』（全11回）がこのほど、単行本『鐔は知っている―土佐の幕末維新』として坂本龍馬財団から出版された。

本書では、鐔をはじめとする史料蒐集家としても知られる小島さんらしく、挿絵や資料写真を多くして、土佐山内家伝来の刀の鐔、名工信家作「一心不乱に」と、山内容堂の命でこれを模写した名工明珍宗義の鐔を絡めて、「鍔」と「刀」と「武士」、「土佐の幕末維新」に迫った。山内容堂から後藤象二郎に渡される“忠誠”の証の鍔。その鍔を腰の刀に後藤は龍馬と会う。龍馬は後藤を“日本一の男”と評価している。それを時代に照らしてみるとまた違った物語が想像されて面白い。

小島さんが「単なる資料報告ではない『読み物』に仕上げた」と言うように、連載に加筆したうえ、柔らかな語り口で、読みやすく分かりやすい一冊である。「腰に刀を差す武士の姿がこれまでと少し違ったイメージとして浮かんでくる」という評にもうなずける。

前田　由紀枝

入館状況

2013年3月20日現在（開館以来7,753日）

◆総入館者数		3,345,302人
◆最多入館	（2010年5月2日）	6,686人
◆最少入館	（2004年10月20日、台風のため）	8人
◆2012年度最多入館	（2012年5月4日）	3,119人
◆2012年度最少入館	（2012年6月19日、台風のため）	57人

編集後記

一年が過ぎた。その気持ちが“また”という感覚につながっている。つまり、年がら年中忙しいということ。年度変わりの今回85号。不ぞろいな原稿を前に、これでいいのかと腕組みである。ただ、今年度も館の進むべき道筋ははっきりしている。企画展は5月から「ジョン万次郎」だが、“見てのお楽しみ”と言えるほどの内容である。歴史研究家の永国淳哉氏に“私のジョン万論”の展開をお願いした。7、8月はよさこい、子供教室、11月ハンドインハンドと続く。今年も龍馬発信策は目白押しだ。窓の向うは黄砂に煙る海。あっそうだ！退職される“板垣副館長”“山中さん”ご苦労さんでした。

（モ）

館だより“飛　騰”第85号（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日　2013（平成25）年4月1日
発　行　高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入 館 料　一般500円・高校生以下無料
身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

長崎に於ける坂本龍馬と池道之助
（池道之助日記から）

鈴木　典子

慶応二年から綴られている長崎での記録を残した池道之助は、私の五代前の祖父です。二年前、その記録を現代訳にして出版してから、大きな反響を得ました。

この紙面をいただいて、坂本龍馬と、どのような拘わりを持っていたかを、私なりの考えを交えて語りたいと思います。

記録からよみがえる幕末の風景

後藤象二郎を頭に三十三人のチームが組まれ、土佐藩の軍艦買い付けのため、長崎に出発します。当時アメリカより無事帰国して、外国の諸事情にくわしいジョン万次郎を通訳としての出発です。

一行が九州に渡り、臼杵から熊本城下を通り、阿蘇の裾野を通過しています。そのスケッチを道之助が残しています。坂本龍馬記念館での展示の中に龍馬の手紙があり、その中に阿蘇山の絵が描かれてありました。タッチは違いますが、まさしく同じ阿蘇山のスケッチです。龍馬がお龍さんとの新婚旅行の旅先で描かれたものです。当時は街道は多くはなく、眺める視点もほぼ同じであったと考えます。龍馬は山の絵の空間にビッシリ文字を書き込んでいます。紙面の小さい巻紙を無駄なく使ったのでしょう。

長崎での出来事の中に、坂本龍馬率いる海援隊、という表現が出ています。道之助はよく、若宮稲荷神社に参詣に出掛けています。（ここには小さな龍馬像が建っています）その若宮から、海援隊の亀山社中までは、わずか十メートルです。数年前、長崎に出掛け、石畳や石段の多い道を歩いてみました。道之助は若宮に出掛けた折、亀山社中にも足を延ばし、隊長の龍馬や隊員たちと、日本の将来について語り合っていたことでしょう。道之助は腰痛を患っていますが、あの石段の多い道を歩き廻っていたからには、腰痛をわずらうのは納得のいくことです。当時の若者が高下駄を履いて走り廻っていたであろうことが想像されます。

龍馬の写真はとても知られています。右手を懐に入れ、当時としては、いや現代でもハイカラと思えるブーツを履いています。いろいろとグッズなどにも用いられていますが、当時長崎で写したものでしょう。道之助も写真が好きだったようです。よく上野の写真所の場面が出ています。

池 道之助

道之助が記した「いろは丸事件」

慶応三年の最も注目されている出来事の一つである、いろは丸事件についても記されています。

四月二十九日今夜市太郎大坂より帰る十日になる　浪人舟いろは丸借り受け大坂へ行ける所　三州箱の三崎において紀州舟に乗りかけられ　いろは丸ついに沈み市太郎助かる備後のトモという所へ上がり対談いたし市太郎は紀州舟にて十二日天気　横山　私　常作　才谷梅太郎　尾小谷孝蔵四五人連れにて聖福寺へ行き紀州藩と談判いたす

同年七月には、丸山にて異人二人が切られたイカルス号事件が起こります。その犯人の疑いが海援隊に掛けられ、龍馬の商売は動きが止められます。そのため土佐藩の主だったものたちは、疑いを晴らすため夜を徹しての調べや談判の様子が書かれています。

十九日天気　今晩西川へ行き三浦へ行き　帰る岩崎氏西川役所より呼びに来り　九つ頃私も共に行き　夜帰る　海援隊舟出帆差止めに付き常の通り横笛

（八月）十五日天気　今日五時に朱林船着　十二日御国元を出帆して本日着　その理由は丸山にて異人二人切られそのの疑いが土佐藩にかかり　その儀につき英軍船が須崎に来たためその儀に付き　来たのである

十六日　今日松井周助殿岩崎氏　私　西役所へ行き談判　御奉行三人は　今晩佐々木五郎宿にて泊まる

私の考えでは、血気盛んな土佐の若者たちは、行動が荒かったのではないでしょうか。「自由亭御出入り御免になる」とあり、料亭の移る様子が出ています。これからして、犯人は海援隊の二十九日夜長崎着　侍宿坂本龍馬などは後より早船にて追々来る由　実に不安である

次にその対談の様子の一部を載せます。

十五日くもり　才谷梅太郎（坂本龍馬の変名）今日紀州へ対談に行く　森田晋三　浪人の者四五十人余り　小そねへ集る

者ではないか、との疑いが掛けられたかな、とも思うのです。

その年の十一月四日いろは丸事件の賠償金と思われる記録があります。

今日紀州屋敷桜町へ金子受け取りに行く…

今は面白くてしかたがない

坂本龍馬は慶応三年六月にかの有名な船中八策を考案します。その七月イカルス号事件が起こります。九月には大政奉還に向けて京に上る途中に下関に居たお龍さんに会い、最後の別れとなったのですが、龍馬は死を予期していたのか、彼女を土佐へは連れて行かず、高知上町の坂本家に立ち寄った後、一人で上京するのです。其のころ、長崎では物々しい雰囲気の様子がでています。江戸より四五百人の侍が長崎へ入った記録があります。その十月十五日大政奉還が成就します。そして、十一月十五日、龍馬は中岡慎太郎と共に京の近江家に於いて暗殺されるのです。

慶応三年は日本にとってとても激動の年であり、道之助の記録はとても重要な資料と考えます。このように詳しく一文字一文字読み進めて行くうちに、歴史については、余り知らなかった私は、今はとりこになり、面白くてしかたがありません。

この資料から、人名についての調査や、当時長崎に集っていた通訳の人々の面々など調べていくと、もっと面白くなると考えています。

話題人インタビュー

奈良県東吉野村教育長 阪本 基義さん

「天誅組義挙百五十年」への思いを語る

東吉野村と土佐に流れる“反骨”と“やさしさ”

「あのとき、山あいの村に新しい風が吹いた」

遠く奈良県にいる阪本基義さんに「スカイプか電話でインタビューさせてほしい」とお願いしたところ、「じゃあ、私が高知に行きましょう」と言うが早いか、数日後には記念館に姿があった。「高知に来ることがうれしくてうれしくてたまらない」と笑う。

阪本さんと言えば天誅組。天誅組と言えば阪本さんというくらい、天誅組総裁吉村虎太郎終焉の地・奈良県東吉野村と、虎太郎生誕地・高知県津野町（旧東津野町）を長年往復して来られた。

今年は天誅組義挙百五十年。東吉野村、津野町ともに町を上げて顕彰する。「維新の魁（さきがけ）」と言われる天誅組や吉村虎太郎への思い、東吉野村について、阪本さんに聞いた。

郷里奈良と高知をつなぐ「天誅組」

――いきなりですが、阪本さんはなぜそこまで熱心に天誅組に関わられているのですか？

学生時代を高知で過ごしたことが原点ですね。高知大学時代に人生が変わった。4年間が私の人生のすべてだとも言えます（笑）。高知には卒業後も少なくとも年に2回は来ていますよ。

南冥寮（旧寮）生だった私は、そこで旧制高知高校初代校長・江部淳夫先生の言葉「感激無き人生は空虚なり」に出会った。内向的だった私が、この言葉を知り、この高知の風土の中で、自由であっけらかんとした人間に改造されました。

大学当時の私は、天誅組については何も知らず、坂本龍馬一辺倒でした。桂浜で海を眺め、龍馬像と酒を酌み交わすような学生でしたね。

郷里に帰り教員となって、生徒たちと村内探訪をするうち、天誅組志士の墓や史跡を知りました。思わぬところで郷里と高知のつながりを知ったんですね。そこが始まりでしょうかね。

高知には格別の思いがあったから、虎太郎たちに興味が募った。天誅組を通して、村への新たな興味も生まれたのですね。

流行神（はやりがみ）になった吉村虎太郎

――それにしても、津野町はともかく、高知県下で吉村虎太郎や天誅組といっても関心が広がりにくい。それなのに元々は縁もゆかりもない東吉野の人たちが、虎太郎や天誅組の志士たちを150年間も大切に守り顕彰しているのはちょっと不思議な気がします。

確かに、今から150年前に武力蜂起した天誅組と幕軍の戦いは、その日その日を平和に暮らしていた東吉野の村民には、思いがけない怖い出来事だったでしょうね。

天誅組を追討する彦根軍が駐屯したときから、何か恐ろしいことが始まると思った村人は、イモを入れる穴に隠れて戦いの終わりをジッと待っていたようです。終わってみると若者たちが死んでいる。かわいそうに思って、手厚く葬った。天誅組のこと、その志の高さを知ったのは後のことです。

特に吉村虎太郎は、三人の総裁の中でも一番若い27歳（享年）でしたからね。気の毒に思ったのでしょうね。村人は数ケ月後の文久3年（1863）の冬には碑を建てています。

しかも明治の初めには、虎太郎の墓を拝むと「産後の肥立ちがよい」「目がよくなった」「歩けるようになった」と評判になり、多くの人が押し寄せたようです。虎太郎は流行神（天誅吉村大神儀）として崇められたのですね。今でも村民は、最初に遺骸が埋められた場所鷲家口（わしがぐち）・原癩処（はららいどころ）を「吉村さん」といって親しんでいますよ。

また、明治28年（1895）天誅組の33回忌には、高知県佐川町出身の古澤滋・奈良県知事が、東吉野村で大法要を行いました。戦死した那須信吾は佐川町の出身、その甥は田中光顕です。古澤知事にも格別の思いがあったのでしょうね。それも、慰霊祭が続く要因かもしれません。

田中にしても、幕末には吉野の十津川に隠れていましたし、その後十津川の人たちが北海道へ移住するときには協力をしています。意外に高知とは縁があるんですね。

お寺や村の有志が行ってきた慰霊祭は、昭和51年（1976）に発足した『東吉野村天誅組顕彰会』が引き継ぎ、現在も顕彰や清掃活動に力を入れています。もちろん、高知の東津野村や梼原町とは友好姉妹町村として交流していただいています。

ちなみに東吉野村では、「虎太郎」の漢字は、『贈位諸賢伝』からとった墓碑にある「寅太郎」を使っています。

幕末からの風 若者よ、”志“を持て！

――なるほど。それでは、天誅組を大事にする東吉野の人たちの気質や、東吉野という土地柄というのはどういったものなのでしょうか。

そうですね。東吉野の人たちを思うとき、「歌書よりも軍書に悲し吉野山」という句が浮かびますね。これは、滅び行く南朝の哀史に思いを寄せた芭蕉の門弟・支考の句です。つまり、京都に対する奈良、北朝に対する南朝という、権力に対する反権力、つまり”反骨“の気質が底流にあるのではないかと思いますね。十津川郷士のように武器は持たなかったが、思いは同じではないでしょうか。

また、志半ばに死んでいった若者への同情には、吉野ゆかりの後醍醐天皇や楠正成（まさしげ）に対する敬意や同情にも通じます。虎太郎が民を大事にしようと庄屋同盟から勤王運動に走ったように、山あいの里・東吉野にも勤王の思いが根底に流れていたと思いますね。

詰まるところ、天誅組は時の権力・幕府に対して蜂起した。そのことに東吉野の村人の判官（はんがん）びいき的な、反骨の気持ちが動いたんじゃないでしょうかね。東吉野は林業以外に米はほとんどとれません。いわば貧しい土地柄です。それだけに、純粋に、天下を動かそうと命を落とした人たちを大切にするやさしさ、志に共鳴する気持ちがあったのだと思いますよ。

また、天誅組は、百年単位で木を育てるという気の長い山の生活に、時代の新しい風を送り込んできたとも言えるでしょうね。

――死に急いだ感もある天誅組ですが、奈良の山里に新しい風を起こしたわけですね。その天誅組ゆかりの東吉野からのメッセージを…。

虎太郎は龍馬より先に脱藩し、土佐では出会わなかったような人に出会った。背伸びしながらも、幕府を倒し新しい世の中をつくりたいと思ったのでしょうね。その思いで一直線に走り抜け、志士たちや時代に先んじた魁（さきがけ）となりました。

そんな天誅組の若者たちを思うとき、クラーク博士のように「Boys be ambitious! = 少年よ、大志を抱け」と言いたい。どんなに貧しいつらい境遇であっても、若者よ志を持て！ということです。

また、天誅組を150年間大切にしてきた東吉野の人たちのやさしさを伝えたい。やさしさを知ると、感謝の気持ちが生まれます。私自身、天誅組のお墓にお参りして、自分に向き合い、人生を見つめ直しています。

阪本さんは生粋の奈良人でありながら、土佐人ではないかと思えるほど、高知のこと、高知の海を愛しておられる。虎太郎や龍馬の話も熱を帯びていた。

それでも、阪本さんから香りたつのは奈良・東吉野の風景だ。教育者として長年、地域を見続けてきた目がそこにあるからだろう。阪本さんの大きな笑顔の向こうに、吉野に散った幕末の彼らを見た気がする。

今年、奈良県東吉野村（永本実村長、人口約2,300人）では村をあげて「天誅組150年顕彰記念事業」（同実行委主催＝問合せ 0746・42・0441）を行う。4月20日の森健志郎・龍馬記念館長の講演『龍馬の先を駆けた男・吉村虎太郎』を皮切りに、連続講座やウォーキング、「天誅組サミット」（10月26日）、慰霊大法要などが続く。記念誌の発行も。また高知県津野町、奈良県五條市・安堵町などゆかりの地でも顕彰行事が多く開催される。■

阪本　基義（さかもと・もとよし）プロフィール

奈良県吉野郡東吉野村教育長。
1944年3月、同村生まれ。
1966年高知大学教育学部卒業。帰郷後38年間、同村を中心に小中学校教員から中学校長を務めた。定年退職後、幼稚園長を経て、2006年から現職に。専門は数学、野球部顧問。
著書『草莽ノ記～天誅組始末～』（2003年）

天誅組（てんちゅうぐみ）
文久3年（1863）8月、孝明天皇の大和行幸を機に、尊王攘夷の先鋒として土佐藩浪士を中心に大和国で挙兵した。主将は公卿・中山忠光、総裁は吉村虎太郎、藤本鉄石、松本奎堂。当初38人であったメンバーは十津川郷士を加え千人に膨らんだが、八月十八日の政変により、幕府軍の総攻撃を受けて東吉野村鷲家口で壊滅した。

天誅組ゆかりの東吉野村・鷲家口の街筋

インタビュアー
前田 由紀枝【まえだ ゆきえ】
現代龍馬学会理事
坂本龍馬記念館学芸主任

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（十三）―

末っ子ふたり

京都国立博物館　宮川　禎一

幕末の坂本龍馬と平安時代の藤原道長に共通する点が多いというと奇妙に思われるかもしれない。

日本史的に見ると家柄というものが確立したのが道長の時代だ。道長が藤原摂関家の祖であったのだ。長子相続を基本とした家格の固定化が進んだのが十一世紀とされている。一方、十九世紀に封建制度を打破し近代の扉を開いた人物の代表が坂本龍馬である。その意味では歴史の対極に置ける両者である。

共通点はふたりとも末っ子であったことだ。道長は摂政藤原兼家の末子。龍馬も郷士坂本八平の末子であった。そして道長には円融天皇の皇后で一条天皇の母である東三条院詮子という強力な姉がいた。この詮子のはからいで道長は甥の伊周をおさえて藤原氏の長者にのぼりつめ、のちの繁栄を迎えることになったのだ。一方の龍馬にはご存知のとおり乙女姉さんがいた。彼女の叱咤激励が龍馬を成長させた。すなわち東三条院詮子と乙女姉さんはよく似ているのだ。道長も龍馬も日本史に残る「お姉ちゃん子」だったのである。

もうひとつの共通点は山登りだ。日本史上の人物で「登山」というキーワードから思い出されるのはこのふたりであろう。

藤原道長は寛弘四年（一〇〇七）の秋に大和国金峯山（現奈良県の山上ヶ岳）に登山して経巻を入れた金銅製経筒を山頂に埋めた。その様子は日記『御堂関白記』に詳しく記されている。当時貴族の間で流行していた蔵王信仰のためだった。道長の経筒は現在京都国立博物館で預かっている。一方、龍馬は慶応二年（八六六）の春に霧島山の高千穂峯にお龍とともに登っている。その様子は姉乙女あての手紙にイラストを入れて書き送った。その手紙は京都国立博物館の所蔵品である。

さらなる共通点はこのふたりをテーマとした展覧会を筆者の担当で開催したことだ。そのせいで山上ヶ岳と高千穂峯というふたつの山にたいへん苦労して登ることになったのである。

藤原道長が一千年前に登った奈良県山上ヶ岳の山頂

コラム・龍馬のこと

ウチの龍馬さん

現代龍馬学会　中田　文

…考えた。実家で独り住む父（92歳）に、わが家に同居してもらう方法を。

そうだ！“わが家の霊園に龍馬像の建立”を提案しよう。面白いことが大好きの父だ。

父は45年前、高知市に家を買い、私の結婚と同時期に墓場購入。父母の墓石は12年前（父80歳時）建て、墓誌板に写真の影彫りを入れた。その隣に“中田家のふるさと（納骨堂）”を造り義叔母と義弟が眠る。その敷地の前に龍馬さんを建てる計画を話した。

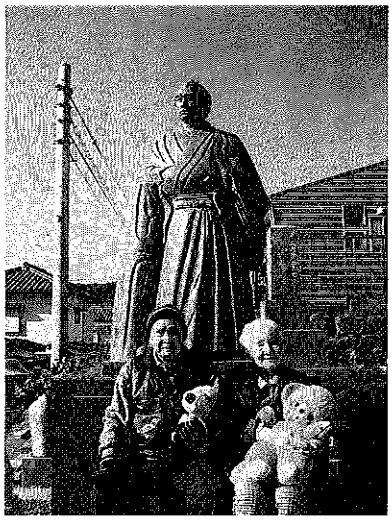
「そりゃ、えい。こじゃんとええのを建ててみいや」父の目が光った。塚ノ原の霊園には、父の家からより朝倉のわが家からの方が近い。父は同居を即決断、その足で近所の墓石商・石心さんに向かった。

―平成24年6月5日朝8時。小雨の中1トン半の龍馬さんが宙を舞った。クレーン車の操縦みごとに、住宅街の電線の上を通過して台座と合体。ビデオ撮影の主人が「こりゃ～中々の男前じゃ。お義父さん立派な龍馬さんが出来てよかったねえ」

2.7メートルを見上げる。

台座には父の石像建立の趣意を掘り込んだ。

「県立坂本龍馬記念館長・森健志郎氏の下に集い、龍馬の志、自由・平等・平和を世界に発信する為、平成24年3月20日「坂本龍馬財団」を設立した。この快挙を記念して、太平洋戦争の元海軍兵士であり龍馬ファンがこれを建立し、その趣意を後世に伝える。平成24年5月吉日　片岡茂清　建立」



―そして今年の両親の年賀状は“ウチの龍馬さん”を背景に父母の笑顔の写真であった。両家の守り神は龍馬さんである。

“話してみるかよ”

龍馬の如くに

高知市議・現代龍馬学会　寺内　憲資

1年間放送された大河ドラマ「龍馬伝」は全国に龍馬の一大ブームを巻き起こし、高知を元気にした。

全国各地の龍馬ファンは続々と龍馬の生まれた故郷を目指したのである。

南国土佐は「龍馬一色」となった。

龍馬ブームの火付け役は何と言っても司馬遼太郎先生の「竜馬がゆく」であった。

そして武田鉄也の「おおーい竜馬」へと続きさらに「龍馬伝」へと続いたのである。

今回の龍馬ブームの背景にあるものは龍馬の人間としての魅力は当然として、閉塞感漂う現今の世相と大きな関係があると思う。

今、国民は龍馬のようなリーダーを求めているのではないか。私利私欲を捨てた志の人物「坂本龍馬」。私には、電光石火の勢いで難局を乗り越えていった龍馬に人々が国政のリーダー像を求めていると思えてならない。

龍馬は脱藩した。我が人生に背水の陣を敷いたのである。

あまりにも有名な「日本を洗濯する」という龍馬の言葉には、龍馬の決意のもの凄さが表れている。

「日本の洗濯」。これこそが龍馬の誓願であったのだ。その為に自らが大きく動いて現状を打破していく。33歳の短い人生であったが、人の為、世の為に我が身を捧げ抜いた尊い人生であった。

私は「龍馬伝」を通じて誓願の人生を歩むことの大切さを学んだ。

愛唱歌「龍馬は今も生きている」の中に「己を捨てて道はつく」の歌詞がある。

私も己の信じた道を歩み抜きたい。

土佐の人間として電光石火、龍馬の如くに。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL(088)841-0001　FAX(088)841-0015
http://ryoma-kinenkan.jp